「畏天敬人（いてんけいじん）」の詳しい説明

「畏天」の語は旧本館に掛かる「畏天場（いてんじょう）」の 扁額（へんがく）（右の写真）に示唆を得たものである。 これは儒者・篠崎小竹が 天保 12 年に揮毫（きごう）した扁額で，幕末の頃，津山藩の志士 井汲唯一がこれを求めて自邸内の剣術道場に掲げていたが、70 年後の昭和 8 年、篤志（とくし）家諸氏の好意により本校に寄贈されたのである。

中国の春秋時代成立の書物で孔子の言行等を記録した『孔子家語（こうしけご）』と 前漢時代成立の『大戴礼（だいたいれい）』という書物に「畏天而敬人」の金言がみえる。「天を畏れて人を敬う」。

では「畏天敬人」はどのような意味を持ち，どのような教えであろうか。中国の「天」の思想とは，「宇宙は天によって保護され，万物は天によって成育する。人間もまたすべて天から生まれたものである。天は絶対的な権威を持ち，地上のすべての現実に力を及ぼすものである。」と教えられた。したがって，天を畏れるということは，万物の支配者である天の公正さを知り，これを畏敬することである。

「敬人」とは人を敬うことであるが，人は天命にかなうように，親子兄弟隣人すべての人に対して，敬愛の念をもって生きるということである。

したがって，「畏天敬人」をまとめると，「万物の支配者としての天を畏敬し崇拝して天の命にかなうように生きることが，即ち，人を尊び，自己を愛する生き方である」ということになる。これをもっと要約すれば，「悠久な自然の摂理に思いを致し，自他共に敬愛する」ということになる。

大切なことは，校訓「畏天敬人」を一人ひとりが現実に即して真摯に，かつ普遍的に考えることである。現代社会には国の内外を問わず，身の遠きと近きを問わず，物質と精神とを問わず，様々な事象が生起している。我々がこれらの事象に立ち向かうとき，謙虚な気持ちと，優れた洞察力を持ち，自然や環境を直視し，周囲の人たちに思いやりをもって接するならば， 21 世紀にふさわしい人格が形成されるものと期待するからである。